

## 芥川だより

発行日\*\*\*2017年1月1日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp  
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

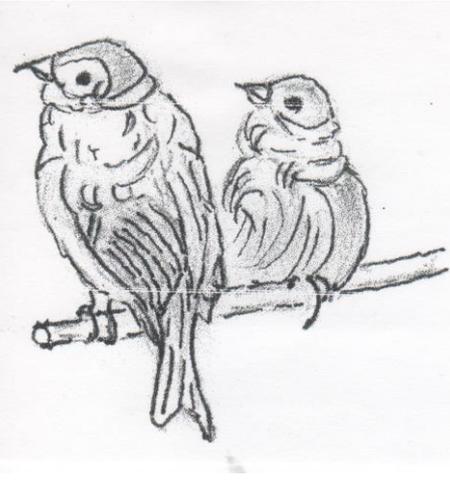
着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870

梵

\*\*\*\*\* 一部100円です \*\*\*\*\*



## 寒雀

急に寒波が来て冬の到来を身にしみだした先週、始発電車に乗ろうと駅に行き、寒いのでホームにある待合室のドアを開けた。突然2羽の雀が飛び立ちガラス戸にぶつかった。私は、とっさに2つあるドアを開けると雀はすぐに外へ出た。何か雀の邪魔をした想いを感じながら椅子に座りホームをみた。すると先ほどの雀が1羽ドアのすぐ近くに動かずにいる。首は動かしてはいるが足を動かさずじっとしている。

寒い夜明けに見つけた暖房のきいた待合室を離れるのがいかにも惜し気なふうである。ひと気のないホームとはいいながら雀が少しも動かず立っている姿をみながら私は少しばかり悪いことをしたように思った。

雀は普通2年ぐらいの命という、家で飼われたら7年ほど生きるとか聞いた。厳しい自然の中で生きるのは雀にとっても大変なのだ。以前ベランダに巣をつくっていた雀のひながモズの攻撃に会い下に落ちていたのを家内が育てようとして努力したがあっけなく死んだ。餌をいろいろと工夫したが野生の環境を作れなかったようだ。亡骸をベランダに埋め花と線香を供えていたことがあった。

小さい時には遊び心で吹雪をさけて小屋に避難している雀を生け捕りにしようとしたが、雀といえどもなかなかすばしこく1羽も捕獲できなかった。ずいぶん身勝手な暇つぶしの遊びをしていたものだと思う。

電車を待つのも忘れて、ホームの雀を見続けていた。2羽いたからもう1羽はどこへいったのだろうか、葉も落ちて裸になりだした木々のあたりを見渡した時、電車の音が聞こえた。その瞬間、もう一羽の雀が飛んできてじっとしていた雀を急がせるようにして2羽と一緒に飛び立った。私はほっとしながら電車に乗った。

死をめぐるあれやこれ(28)

石川 吾郎

お正月には漢詩を取り上げます。今回は「枕草子」などでもおなじみ、唐の詩人・白楽天の髪の毛にまつわる漢詩です。

髪かみの落おちつるを歎なげず 白居易

多病たびょう多愁たしゅう心自知

行年こうねん未老みらう髪先衰

行年こうねん未だ老らういざるに

髪先かみさきんじて衰おとろう

随梳ずいしゆ落去らくきよ何須惜

梳くしに随したがいて落去らくきよす

何ぞ惜おぼしむを須もちいん

不落終須ふらくしゆう変作糸

落おちちざるも 終つひに須すべらく

変かじて糸いととなるべし

病びやう気がちで悩なやみが多いことは、われながらよく承知しやうちしているが、まだ老らう齡ねいに達たつしていな

いのに、頭かぶ髪かみのほうほうが先まんじて衰おとえてしままった。櫛くしととも

に抜ぬけ落ちおちようようと、惜おぼしむ必要ひつやうがあるううか。抜ぬけ落

ちちずとも、けけつきつきよく細こい白しろ糸いとのようようになっなってし

ままうののだから。

これを作つくった当たう時じ、白しろ楽らく天てんはままだ三さん十じゆ才さいだだった

といいます。この前まへ年ねんに科か挙ぎよに合あ格かくをししたけれど、

2 ページに続く

まだ官職につくために猛勉強をしている最中だったようです。当時の受験勉強の猛烈さは想像を絶していました。中国の科挙は合格すれば超エリートで、自分ばかりでなく一族の繁栄も約束されたので、それこそ死にもものぐるい。彼はこの二年後に試験に合格をはたして、秘書省校書郎という職に任用されて、そこで生涯の親友となる、同じく詩人として名高い元禎げんしんと同僚になったといっています。白楽天はその後、官吏としては超エリートでしたが、鋭い社会批評を含む詩を作り活発に発言を行い、左遷されて不遇をかこちました。しかし何時も字あざなの通り楽天的な精神を保ち七五才の長寿（当時としては）を生き抜いたということ。見習いたいものです。



巻頭 エッセイ	下村嘉明	1
巻頭 コラム	石川吾郎	1
マスコミが伝えないニュースの側面	伊藤明	2
素老人☆よもだ帳	坂本一光	5
ドイツ哲学の旅①	祖蔵哲	6
大峰奥駈道	梵店主	7
おちよこチヨイぼけ	A O	8
父のシベリア俘虜記	若山哲郎	10
大人の今昔物語 29	石川吾郎	11
B級サラリーマン渡世譚 42	明石幸次郎	12
オクラの山たより	困了生	13
我がおくのほそ道の旅 1	成瀬和之	14
孫ワオッチング 13	福田圭	14
米国紀行 2	河原林成行	15
明治は遠くなりにけり	大江雄鬼	16
編集後記	嘉	17
女90年の軌跡	眞粧	18
俳句	土田裕 影山武司	18

## みんなで知ろう日本の危機（17）

伊藤明

### マスコミが伝えない

### ニュースの側面

#### ◆はじめに

新年を迎えて、今年もよろしくお願ひいたします。さて新年にあたって安倍首相は、恒例の天皇の「新年の所感」の発表を、負担軽減の名目で封殺しました。

天皇の所感の内容は、平和祈念・平和憲法擁護の内容が予想され、自分に不都合な内容になることがわかっていたからだと考えられます。

その代わりに安倍氏は自分の「年頭所感」なるものを発表しました。それは実態のない美辞麗句に彩られていましたがその中で、特に彼は「一億総活躍社会」を強調しています。しか年末に小さく報道された次のニュースは、その内容がどんなものであるかを如実に語っています。

年末の大阪で、窓ふきの仕事中の男性がビルから転落して死亡したというニュース。この人は何と八一歳であった、というもの。

「年頭所感」で安倍晋三氏が言う「一億総活躍社会」の実態がどんなものであるのか。国民を止めどなく貧困に追いやり、八十歳を超えてもビルの窓ふきといった危険な仕事をしなければ生活が立ちゆかないような、国民にとって限りなく悲惨な社会。そして安倍首相自身は、天皇をさしおいて、内容空疎な世迷い事のような「所感」を元日に発表しマスコミに一斉に発表させる・・・。

私がこの文章を書く目的を今一度確認しておきたいと思ひます。それは安倍政権に対して、本質を突いた鋭い批判が大新聞やテレビなどのマスコミからは、ほとんど消えてしまっているのが現実です。テレビのワイドショーが政権の応援団になって、国民の政権批判の目を反らす役割を担っていることもますます明らかです。国会で重大な政治問題が取り上げられる時期には、必ずといっていいほど有

名人の麻薬・違法薬物事件などで大騒ぎして、国民の関心を反らすといったことを繰り返しています。NHKが国会の重要な質疑などをテレビ中継しないなども目立ちます。今後これらと同様なことが繰り返されると予想されます。

またマスコミの重役や、ニュースやワイドショーに登場する主な「解説者」たちが、安倍首相と繰り返し会食を重ねていることが知られています。これは新聞の「首相動向」といった記事を注意深くチェックすると判明してくることですが、マスコミではほとんど報道されません。一部の良心的なネットサイトが伝えるだけなのです。

これらの中には、産経新聞、読売新聞ばかりでなく、朝日新聞、毎日新聞や共同通信などの首脳が含まれています。さらにこの種の会食の常連は時事通信の田崎史郎、NHKの島田敏雄（『日曜討論』の司会の解説委員）、さらに『報道ステーション』のコメンテーターの後藤謙次も含まれています。このように権力の中枢と結びつく報道機関が「権力の暴走のチェック」という本来の報道の役割を果たせるわけがないというのを、皆さんも肝に銘じておいていただきたいと思ひます。

このほかにも安倍政権を露骨に持ち上げる人物としては、松本人志（タレント）、辛坊治郎（アナウンサー）、青山和弘（日テレ）、岩田明子（NHKで最も露骨に安倍首相功績をアピール）など。これら名前の出た人物が語ることは、批判めいたことであっても安倍政権への批判ではなく、政権を擁護する目的で行われている

のだから口を頭置いて、ニュース番組やワイドショーを見る必要があります。

ちなみに昨年のわが国の「報道の自由度」は一昨年に比べさらに下がり、世界で七十二位という低位です。

このような状況で、私は少しでも多くの方々に、今わが国でどういうことが起こっているのかを、私が知り得た範囲でお伝えしていきたいと思っております。

### ◆「共謀罪」法案提出へ

新年になってまた一つ、重大なニュースが飛び込んできました。安倍政権は通常国会で「共謀罪」創設を狙うと発表したのです。「テロ等準備罪」と名前を変えて批判をかわし偽装をしています。この「共謀罪」は行為ではなく、行為に至らない意思だけでも処罰できるとするものです。一年前（二千一五年一二月号、第一〇七号）のこの記事に「共謀罪」について解説を書きましたのでそれを再掲します。この悪法が現実には安倍政権により国会提出されるのです。

#### 「共謀罪」新設の動き

共謀罪というのは、二人以上の者が、犯罪を行うことを話し合っただけで合意することを処罰対象とする犯罪のことです。具体的には「行為」がないのに話し合っただけで処罰するのが共謀罪の特徴です。しかし単なる「合意」というのは「心の中」で思っただけのことと紙一重の段階です。この共謀罪は刑期四年以上の犯罪について対象になるといいます。対象となる犯罪は六百種類あります。ほとんどあらゆる分野の犯罪が該当します。二人以上の者が

話し合いをして合意するだけで、罪となるという法律なのです。たとえば、二人以上で飲み屋などでも会話を交わすだけで、犯罪とされる可能性があります。これはまた「未遂」「予備」「共謀」を例外とする我が国の刑法の大原則に合致しないものです。これとともに、盗聴や検閲も公然とされることになるでしょう。またネットのチャットなども対象になると言われます。このように個人の自由・言論の自由を剥奪する恐ろしいものです。さらに密告をした者を罪に問わないので、日本が密告社会になっていくこととなります。

憲法学者の小林節氏によれば「共謀罪により政府批判も自粛せざるを得なくなるといいます。かつての治安維持法と同じような機能をはたす」と語っておられます。共謀罪は、これまでも幾度も国会に上げられてきましたが、その内容のあまりのひどさに繰り返し廃案にされてきたという経過があります。しかし今回テロを口実にして、これまで通らなかつたこの共謀罪を通そうとするのです。（日弁連が共謀罪反対のパンフレットをネットで公開していますので、そちらもお読みください。）安倍首相は、この共謀罪の新設について「重要な課題と認識している」と語っているのです。

安倍氏は、いったん選挙で選ばれたら自分が決めるので、民意はいらないと述べるような専制主義的な考えの持ち主で、議會を無視して、国民を縛り、この国を警察国家、戦争をできる国にしていく道

を突進しているといえます。（引用終わり）また共謀罪は、団体構成員を処罰する団体規制法であり、処罰範囲が不明確なまま拡大適用されれば、政府権力が抵抗する団体に対する一網打尽的弾圧が可能となってしまう点で、戦前の治安維持法と共通しています。

共謀罪を創設しようという政府の意図は明らかで、政府批判勢力を処罰して、人権を抑圧した戦前日本なみの独裁恐怖社会を作るための布石であり、安倍政権の大きな目標である改憲に向けて外堀を埋めるといふ意味ももっています。

改憲により、首相が「緊急事態」を宣言するだけで法律と同じ効力を持つ政令の制定が可能になる緊急事態条項と、共謀罪がセットになれば、国民はすべての自己決定権と反対の意思表明の機会を奪われてしまいます。秘密保護法により目隠された国民は戦争へと追いやられていきます。

国民の力を結集してこの成立を阻止する必要があります。

### ◆昨秋の臨時国会

昨秋の臨時国会は、安倍政権がどれほど反国民的な政府であるかをハッキリと示しました。

・全く意味のなくなったT P P関連法を強引に国会で通過させ、年金をカットする法制、国内にカジノを作る法制といった、大多数の国民の利益に反する法律を、次々に強行採決していく。一方で国民に理解を広げる国会での議論はほとんど行われなかつたのです。カジノ法案の

審議ではわずか六時間だった衆院内閣委員会では、自民党の質問者が時間をもてあまし「般若心経」を唱え、持ち時間を費やしたのでした。これが安倍政権下の「言論の府」の姿なのです。

「強行採決するかどうかは議院運営委員長が決める」。環太平洋経済連携協定（T P P）承認案・関連法案をめぐる、山本有二農水相の発言もありました。

自民党が衆参ともに単独過半数を握った「一強体制」のもとで、国会は立法院としての機能を果たしているとはいえません。また安倍氏の国会答弁「私が述べたことをまったくご理解いただいていないようであれば、こんな議論を何時間やっても同じですよ」という発言は、まさに民主主義の根幹である国会での議論を拒否する姿勢そのものです。

また年末には、安倍氏は次々と「外交」を繰り上げましたが、その内容は支離滅裂で、その成果はほとんどありません。

トランプ次期大統領と会談（翌日トランプはT P Pからの離脱を表明）、プーチン会談（領土問題の成果は全くなく、北方領土での経済活動を合意。これはロシアの四島領有を固定化する可能性が大）、そして真珠湾訪問（これはトランプの政敵オバマの花を持たせるだけ）、成果というものが何もない。

さらに言えば、安倍政権の下で拉致被害者も帰って来なかつた。消えた年金も消えたまま。やったのは秘密保護法、集団的自衛権、そして原発の再稼働、沖縄の辺野古基地とヘリパッドの強行など沖縄いじめ。これらの安倍政権の裏側につ

いての、自民党のある議員の言葉が伝えられました。これは安倍政権の実態をよく表していると思います。

「とにかく今井（尚哉首席秘書官。安倍氏の中心的なブレーン）は、外交舞台をその場限りの派手なサプライズ演出のチャンスとしか考えておらず、うまくいけばその勢いで解散・総選挙を打って政権延命という一本やりの単純思考。五月の伊勢志摩サミットで、偽データのペネルを作って『リーマン・ショック級の世界経済危機』を演出してダブル選挙に持ち込もうとしたのも、今井。プーチン来日に大いに期待を持たせて、年末年始の北方領土解散をさんざんあおったのも、今井。それがダメなら真珠湾というのも、今井。彼は、自分の仕掛けたことが失敗だとは言えないから『成功した』と安倍に囁き、マスコミにもそう書かせる。安倍も自分が失敗したとは思いたくないので、今井の言葉や、彼が切り抜いてきた新聞記事を信じようとする。二人で手を取り合って幻想空間を遊泳しているかのようだ」（日刊ゲンダイ）。

これではわれわれの国の利益も何もあつたものではありません。国益を踏みにじつてまで、ひたすら政権の延命に突き進む安倍氏の姿勢がよく分かります。

### ◆オスプレイ墜落事故

さらにまた昨年十二月十三日の沖縄でオスプレイ墜落事故が起きました。その経緯もさまざまな意味で驚くべきものでした。沖縄の安慶田副知事の抗議に対し、在沖海兵隊トップのニコルソン四軍

調整官は「操縦士は住宅、住民に被害を与えなかった。県民に感謝されるべきだ。表彰ものだ」と言い放ち、抗議されること自体に不満を示した。机をたたき「政治問題にするのか」と開き直る場面もあったといひます。沖縄を見下す「植民地意識丸出し」の暴言、植民地支配者の発想としか思えない発言です。米国大統領に抗議をして、謝罪をさせオスプレイ配備を止めさせることが必要です。またこの問題の解決としては、日本の独立を侵犯しつづける日米地位協定を変えるしかありません。

この墜落事故についてのマスコミの報道ぶりは、注目に値するものでした。このオスプレイ事故は、日本語の正しい意味での「墜落」そのものでしたが、これを日本のマスコミはどう表現したか。読売は「着水」、NHK、日経、産経、朝日、毎日、東京はすべて「不時着」。(毎日)は防衛省が「墜落」否定したと説明) テレビでもほとんど同じ内容の報道でした。この裏には、政府からの圧力があつたものと考えられます。琉球新報・沖縄タイムズは「墜落」と正しく表現しています。

実態は、機体大破で立派な「墜落」です。米軍の準機関紙である「星条旗新聞」や、米FOXニュース、英・BBC、ロイターなどの海外メディアは「クラッシュユ」(墜落)と報じているのです。

オスプレイはこれまで繰り返し安全面で危険性が訴えられてきました。そしてついに国内でこれほどの重大事故を起こしたのです。そんな状況でも日本のマス

コミは大本営発表のように政府発表をそのまま伝えつづける。これはもう死んでいるも同然です。

その後の経過にも驚かされます。原因究明もされていないオスプレイの事故からわずか六日で、政府は飛行訓練の再開を許可し、さらに年明けには空中給油も再開された。さらに二〇一八年度に陸上自衛隊にオスプレイを導入して空中給油訓練を(本土で)開始することまで発表をしています。事故の多発しているオスプレイを日本全国いたる所の上空に飛ばし訓練をすることになるといふことで、まさに沖縄県民と日本国民の生命を何とも思わぬ政権であることです。

### ◆安倍政権の正体

第二次安倍政権が発足して五年目となり、安倍政権の正体がますます鮮明になってきています。それは民主主義を破壊して、貧困化と格差拡大により国民の生活をますます困難に陥れ、自分たちの政権維持のためには、ウソも平気、国益に反することも平気でやる。

米国政府と米軍の闇の命令には唯々諾々と従い、また経団連などの大企業の利益をふくらます政策だけを強力に押し進める。そういう意味で、安倍政権のふるまいは一貫しています。一般国民は搾り取る対象としてしか認識されていない。

そのためには、経済学者・植草一秀氏によると安倍政権は「**五つの策略**」を用いていると指摘しています。つまり支配者が一%による支配を維持するために用

いている五つの策謀なのです。それが、**教育、洗脳、弾圧、墜落、買収**だといひます。洗脳はマスコミによる情報操作。弾圧は政治的敵対者に対する人物破壊工作(特定の著名な個人を陥れる、これまでに小沢一郎氏などが対象にされたことが知られている)。**墜落**は3S(スポーツ・セックス・スクリーン)による人心誘導(オリンピックはまさに恰好な例)。買収は御用学者・御用コメンテーターの養成。しかしもっとも根幹に置かれるのは**教育**。「三つ子の魂百まで」と言われるが、教育を通して一パーセントの支配層に都合の良い人間を作り出すことが何よりも重視される。植草氏は日本の教育が「**覚える・従う**」偏重で、「**考える・主張する**」が欠落していると指摘しています。尊厳ある個人を育成するのではなく、国家にとつて都合の良い人を育成することが目指されているのだと。教育への国家権力の介入・支配を今後もさらに強化していくものと考えられます。

### ◆きたるべき衆院選挙

年明けの衆院解散の可能性はほぼなくなりましたが、今年中に衆院解散、総選挙が行われる可能性が高いと言われています。安倍政権はタイミングをみはからつていっているのです。

安倍政権はこの選挙の結果によって、いよいよ本格的に憲法改変に乗り出すことが予想されます。ただ自民党だけではそれは無理で、公明党との連立に加え、完全に与党の補完勢力となつている「維新

の党」を加えて、安陪政権は三分の二の議席獲得を狙っていると考えられます。維新が主張していたカジノ法案を、年末にあれだけ無理やりに通して、貸しを作ったのは、まさにこの憲法改変に向けての布石であることは明白です。つまり次回衆議院選挙において、自公に維新などを加えた改憲勢力が三分の二を取ってしまつと、ほとんど確実に憲法「改正」がなされることになり、これはほぼ必ず自民党の憲法草案に沿つたものの、緊急事態条項を加えたものになるのです。それに「共謀罪」も加わります。

いったん「緊急事態」を宣言すると、その後は延々と緊急事態が延長され、その間には人権は制限され、言論の自由は奪われ、内閣が勝手に法律に準ずるものを発令し施行できることになります。そして「共謀罪」によって、思想弾圧をすることもできる。これはまさにドイツのナチス政権のやり口そのまま、この国はまた、戦前の暗い谷間の社会に逆戻りしていくことになるのです。

そして下手をすれば国民にとつて、この総選挙が最後の選挙権の行使といつたとにさえなりかねません。

この衆院総選挙には、反安陪・改憲を許さない勢力の統一共闘をぜひとも実現しなければなりません。全力をもって安陪政権を倒す必要があります。今年二〇一七年は、歴史の大きな転換点となることは確実です。

◆いつかは広く、深く知りたい

新しい年が始まつた。アベ政権に維新も加わつた暴走政治のすす払いもすませず新年を迎えたが、自分のことを世界のことを広く深く知るとはどういうことか、よまだ話はさて置いて、まじめに考えてみようと思う。

○世界を知ることと自分を問うこと―

学ぶとはどういうことか

むかし大学教育のあり方を考えなければならぬ立場にいたころ、人間が学ぶとはどういうことか、その的確な表現はどういうものかと思ひ悩むことがあつた。確かに表現できないのは、問題の本質を的確にわかつていないからである。それはつきりすれば教育の問題はほとんど解決するのではないか、とまで思つた。しかし、学ぶとはどういうことか、明確な答えは容易に見つからないでいた。

あるとき、大学教育に関する全国会議で国際基督教大学に出張することがあつた。会議が始まるまでの間、受付で渡された資料の中にあつた大学案内を何気なく見ていたときである。『人間はどう生きてきたかを知り、自分はどうか生きてきたかを知り、自分はどうか生きてきたか』という言葉が目飛び込んできた。『魂は表現されなければ、それが存在するのかわるか、当人にさえもはつきりし

ない』(加藤周一、出典失念)というが、まさにこれが目から鱗か、魂は表現されたとばかりの、身体の中を電流が走るようなふるえを感じた。この言葉は、受験生に向けて国際基督教大学の教育を解説した頁に掲げられた見出しの言葉であつた。まさしく、『足元を掘れ、そこに泉が湧く』のだ(ゲーテ、出典知らず。二〇〇三年十月一日開催の島根大学・島根医科大学統合記念式典、パンフレットによる)。探し求めていたものがそこにあつた。

それでは、人間はどう生きてきたかを知るとはどういうことか。それは、人間が生きてきた自然はどうなつてゐるか、人間はどんな社会をつくりどのような歴史を展開したか、どんな文化を創造し文明を築きあげたか等々について知ることだろう。すなわちそれは、人間が生きてきた世界を知ること、世界を発見することである。それはまた、「私は世界のどこにいるか」と問うことであり、世界の未来を問い、世界の未来に生きてゆく自分自身を発見することでもあるだろう。世界を発見しなければ、世界は無に等しく、人間と人間が生きてきた世界への信頼は生まれぬ。その信頼だけが、この世界を生きていく自らの人間的力量を高めようとする自覚を生む。

人間が学ぶことの根底にあるのは、いつでも、どこでも、世界の発見と自己の発見である。大人であろうと子どもであろうと、何かの専門家であろうと一般の

社会人であろうと、人間が学ぶ意義に本質的な違いはない。それは、世界を知ることと自分を問うことに尽きる。遠心力と求心力がちょうど一体のものであるように、世界を見る者は自分を見るだろう。五十歳を過ぎた頃にそんなことがようやく、私にもわかつて来たのであつた。

○『出会つた人の数だけ幸せになれる、歩いた峠の道のりだけやさしくなれる』  
『出会つた人の数だけ幸せになれるなら、歩いた峠の道のりだけやさしくなれるなら：』は、『生きる』という河島英五の歌の一節である(非売品ソノシートレコード盤)。人間の理想は、その逆ではないだろう。出会つた人の数だけ不幸になるのはまっぴらだし、歩いた峠の道のりだけひたすらきつくなつた人などご免である。しかし、今や、人間と人間が生きてきた世界への信頼が音を立てて崩れていく、そう思わざるをえないほど悲惨な出来事、事件・事故・政治などにかかる社会的象徴が後を絶たない時代に入つていく。

人間が見る夢と彼が生きている現実とは、二つの別のことである。だからといって、夢を変えて現実に合わせてのではなく、現実を変えて夢に近づけようとするのが人間であるだろう。確かに巨大な社会の中で一人の力は限りなく小さい。一見、何ほどの変化も起こせないと考える。しかし、たとえ小さな力であってもそれを

尽くさなければ、現実には永久に変わらない。したがって、今を生きる人間の課題は、さまざまな困難や矛盾のなかで人間としてこうありたいという理想をどう実現するか、そこにこそあるだろう。社会は人間がつくるから、人間が変えることができる。人間の偉大さはそこにあるのだろう。そうでなければ、人間は闇の中に生きるしかない。

微力なもの偉大さは人間にだけあるのではない。

大海も一億分の三センチメートル

極微の水がつながればこそ

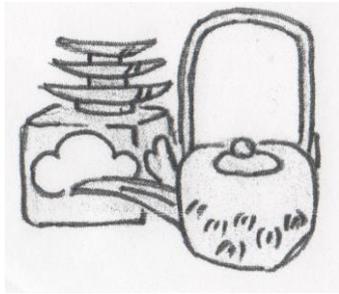
水の粒子(分子)間のつながりの強さ(エネルギーの大きさであるが)は、水分子内部の(水素原子と酸素原子の間の)つながりの強さの十分の一ほどの強さに過ぎない。水分子間に存在するこの微妙で適度な、絶妙な強さ(同時に、絶妙な弱さでもある)のつながりが、あらゆる物質から水を区別し、水を水たらしめ、海を海たらしめる。一人の人間の自立と人間間の協同のあり方を考えるとき、自然の巧みさには学ぶべきものがあるだろうと思う。自立した私が必要ならば、私にはない。強固な存在である私と、私たちの間のつながりの絶妙さは矛盾しない。学ぶことと生きることは、人間にとって同義である。いま、人間と文化、社会及び自然に関わる問題は深刻の度を深めているように見えるけれども、それだ

け学びがいのある時代だと言えるのかも。しれない。腐り切った時代に腹が立つても、このドロドロとしたものを取り払ったとき、世界はその果てまではずきりと見とおせるかもしれないと思えば、絶望の中にも希望は生まれる。だから七十歳を前にして私はまだ、いつかは広く深く知りたい、そして世界へ漕ぎ出す羅針盤を持ちたい、とそう願っている。

■大分の素老人  
(かたちは心であり、心はかたちになる)

(追伸) 前号の宿題の模範解答は示さない。現代日本の政治には、大概のことはよもだ話にして済ます素老人も、あまりに腹が立つからである。

アベ独走トランプ抜けたTPP  
賃金は必ず下がる年金も  
成長戦略武器原発にバクチまで  
アベの道道もないのに道半ば  
大破して不時着というオスプレイ  
温泉につかれば信義生まれるか  
大国の覇権日本を舐めた年



### 哲学屋のつづき (30)

祖麿哲

#### ドイツ哲学の旅Ⅵ(最終回)

南ドイツ、ミュンヘン近くのディンケルシェルベンという田舎町で七月二十五日、久しぶりのゆつくりとした朝を迎えた。修行中は五時起きで早朝座禅に励んだが、二十三日からの二日間の禅セミナーも昨日の昼で終了しドイツからの参加はそれぞれ帰っていった。私たち日本からの六人だけが宿泊している。今日はいよいよ帰国の日、ドイツ旅行最終日だ。相変わらず禅寺らしい質素な朝食を済まし、宿泊させてもらった部屋を掃除をして帰り支度をした。最初の計画はここから西のミュンヘンでいさんと合流して特急でフランクフルトに向かう予定だったが、親切にも禅寺の「夫婦がウルムというフランクフルト方面に近い駅まで送ってくれるというので計画を変更し、その旨をこの禅寺セミナーに参加しないで別行動しているIさんの携帯電話に伝えた。その際電話で確認したが、やはり彼は二十

二日の夜にミュンヘンでテロに遭遇したとか。とにかく無事なのがわかり一安心できた。世界的に大ニュースなので日本人が巻き込まれ怪我でもしていれば当然報道されるのだが。

車はドイツ高速道路アウトバーンを走り三〇分程でウルムの町に到着した。駅舎入ると警官がたくさんで旅行者をチェックしていた。特にアラブ系の人への調べは厳し

く厳重でした。見ていてなんだか気の毒になります。禅寺の日本人の奥様から聞いた話が思い出されてきました。難民や移民に対する敵視の状況は、自分たちのような外国人にとつととても不安になるとしみじみ話していました。日本にいるとなかなか反対の立場に立てませんが、このように外国にいると身をもってその深刻さが理解できます。

さて、Iさんを探さなければ、彼はミュンヘンから約束どおりここで電車を降りているはず。少し探すと見つかりました。無事な姿を見て一安心。でもなんと彼は昨夜からこウルム来て宿泊していたとか。ドイツ語はおろか英語も満足に喋れないのにどうしてそんなことができるのか。しかも今まで三日間も隣国オーストリアのザルツブルクへモーツァルト巡り。Iさん曰く、身振り手振り、日本語でなんとかなると行動力が語学力に勝るんですね。でも危険は付き物。ミュンヘンの事件では、一人のガンマンが繁華街のレストランで銃を乱射。その時Iさんは少し離れた所において、パトカーが引つ切り無しに来るのを見て事件を知り、駅へ向かったとか。しかし、ミュンヘン駅は閉鎖されていたらしい。もしあの時そのレストランにいればアウトでした。本当に身近なテロという国際事件との遭遇に日本では経験できない特別な気持ちを感じました。自分だけ、自分の国だけは安全という思い込みはただの願いだけなのだという現実です。

無事にIさんとの再会を果たし、十一時

過ぎのフランクフルト行きの電車に乗り込みました。禅寺のご夫婦にお別れの挨拶をすると本当にドイツともお別れです。十四時にフランクフルト空港に到着。搭乗手続きをすました機中の人となりました。Iさんとの話しはまだ少し聞き逃しがありました。例の女バス運転手とのトラブルです。二十二日私達と禅寺で別れて、ミュンヘンまでバスで送ってもらったはずですが、そこでトラブル発生。女性が五〇ユーロを請求してきたらしいんです。彼は十五ユーロの約束だと頑固に主張したところ、彼女は腕をとつて大声で公衆の前で何か叫んだとか。怖くなって仕方なく彼女の言う金額を支払い無事解放されたとか。私はすぐに謝りました。私が送迎の金額交渉した時の聞き間違いでした。十五と五〇の英語の発音は日本人にはよく間違える。済みません、深く彼に謝りました。Iさんはそんなことではなく彼女の突然の強行な行動に驚いたのだとか。日本人の女性がおとなし過ぎるのか、外国人の女性がしっかりしているのか。どちらにしても女性の生きる力は強いです。

さて、この度の七月七日から二十六日、二〇日間に及ぶドイツへの旅。列車に乗りドイツの歴史に身をもつて触れた体感の旅。ドイツの歴史、音楽、歴史そして現代を感じる事ができました。そのなかで改めて考えたのは日本の歴史に対する認識の甘

さです。

最近、米国のある有名な旅行雑誌で東京と京都が世界で魅力的な都市に連続して選ばれたというニュースを耳にしました。京都は前年よりランクダウンしたらしいですが、それでも常に高いランクだとか。日本人なら当然を思つてその記事の詳細を読んでみて少し考えさせるところがありました。外国人がなぜ京都よりも東京を魅力的な都市に選ぶのか。その理由は古いものと新しいものが見事に混在しているという点かららしいです。そういえば、東京では渋谷スクランブル交差点と浅草の雷門。スカイツリーと築地の魚市場など新旧の混合、カオス状態。京都でさえ、京都タワー、木屋町先斗町とお寺や神社という混合文化。外国、特にヨーロッパでは決まっているような都市景観は見られません。特に第二次大戦で徹底的に破壊されたドイツやポーランドなどの各都市。建物構造が石と木との違いもありますが、彼らは破壊されたものをそのまま元の姿に戻します。それは執念に近いもの。今回訪れた、ドレスデンの復興はドイツの象徴ですが、他の都市でも状況は同じです。私達、日本人は日本は歴史的に古いものが多く残されているから世界の人々が観光に訪れるのだと思つているかもしれませんがそうではないのです。そういえば、外国人に人気ある観光スポットと日本人の観光地はズレがあるようです。すぐに歴史的な建物を壊

してしまう日本人。そして都合の悪い歴史をすぐに、水に流す、日本人。反省しなくては。

さて、六回にわたつて書いてきましたドイツ旅行記も今回が最後です。やはり、日本を離れて世界を見てみるとしみじみと世界の広さを感じられます。しかし、一方では世界はますます狭くなっています。インターネットによる情報は瞬時に世界を駆け巡ります。けれどもこのネット社会が大変な変革をもたらしています。

オックスフォード事典を発行する同社が選んだ昨年二〇一六年の「言葉」は「Post-Truth」(ポスト真実)。来週からはまたこの世界を哲学して考えましょう。



## 大峯奥駈道(7)

梵店主

よつちゃんには、「芥川だより」に掲載されたA〇さんの「義兄とその家族」を読んで大変興味を持った。お姉さんが熱心に義兄のガンを克服するために研究した食、食べ物の中でもニンジンについて「これは自分にも効果があるかもしれない」と考えた。以前に脳卒中で倒れた江戸っ子エンちゃんからも聞いていたからである。エンちゃんも、長く「芥川だより」に寄稿して頂いた方である。彼女は七〇歳の時に阪神大震災に遭い、寺が倒壊しその修復に苦勞されていた時に突然倒れ、集中治療室で治療をうけ何とか命を取り留めたものの、まったく歩けなかった。

それで途方に暮れたエンちゃんは、お寺の本堂に座り無心になって祈った。すると阿弥陀如来が現れて寺の庭にあるドクダミの葉を食べるといふ啓示をもらった。早速、庭にはえているドクダミの葉を一〇〇杯ほど取ってきてミキサーでジュースにして毎日飲んだそうです。またニンジンも毎日ジュースにして飲む。かたや足腰を訓練するために、家族の人に「私が、はいつくばってもがいていても手助けしないで」と断つて筆筒の引き出しを利用して立つ練習をされた。

最初は一番下の引き出しを少し出して立つ訓練を、慣れてくる上の引き出しという具合にして自分ひとりでもハビリを

されたのである。すさまじい根性である。

彼女は夫を早く亡くして突如、寺の住職になって寺を二つも維持し、子供三人と姑の面倒を見なければいけなかった。そのうえ地震で寺が崩壊し借金して立て直ししなければならなくなった。非常な困難にあつて倒れたのであるが、寝てはいられない。復興しなければならなかったからである。

エンちゃんは、見事にリハビリをやり遂げ寺も立て直し元氣になられた。まさにエンちゃんの氣迫だとよっちゃんは感じた。エンちゃんは寄稿されるたびに来店され食事を共にして小遣いをもらって恐縮した。

八十八歳になられた記念に「百日紅」という題名でこれまで寄稿された文を編集して本にした。エンちゃんもすごく喜ばれ宴会をしていただいた。しかし、まもなくまた倒れられた。

そんなことなどを思いながら、よっちゃんには、食事に何を食べようかと考えた。

まず見本は病院食である。病院食はよく考えられている。病院食は一番に量が少ない。二番に繊維質のキノコ類、インゲン豆類が毎日である。それらを参考にし、よっちゃんは、米、リンゴ、飲むヨーグルト、ニンジン、納豆、小松菜、ブドウ等を食べることにした。ニンジンも土鍋で蒸して必ず毎日食べた。リンゴも毎日。理由はわからないが、結果として検査数値は改善した。毎日歩くこと、節制

した食事、ストレスを感じることをしないし考えない、好きな事だけをする（仕事はほどほどにして）、芥川だよりだけは一生懸命にする。

こんな生活ができたもの周りの協力があつてのことなのだが、無責任なバカになることがよかつたのかもしれない。

よっちゃんは、本を買って読むことは十年前からしなくなつたが、「芥川だより」だけは何回も読みつくしているので、大変参考にしたりヒントを得たりしたことが病氣を克服した理由かもしれない。「芥川だより」にはウソは書かれていない。みな本当の実録小説ばかりだから、それぞれ個性や環境は違つていても基本的には大差がないから大変参考になる、とよっちゃんは考へている。

もうひとつは、近くにある天然温泉に毎日通つたことである。回数券を買い毎日二時間ばかり露天風呂に浸かつた。これはかなり効果があつたように思う。病氣になるまでは一度も行ったことがない温泉だつたが行きだすと、湯治客の氣持ちがわかるようになった。毎日通うといろんな人を見かける。病氣を患つていそうな人、大きな手術の跡がある人、足腰が悪そうな人、たまに見る人、毎日見る人、身障者の大きな息子を連れた父親など様々な人生模様が入浴客から感じられた。自分が大病を患つているために目につくのは弱つた人ばかりであつた。

元氣な時には目もくれなかつた人に自

然と目が向きこの人達はどんな想いで生きていくのだろうか、と自分に問いかけるのである。話はせずとも、何か分かる合えるものを共有しているような妙な連帯感をよっちゃんは感じていた。そうなんだ、おれひとりではないんだ、病で苦しんでいるのは、これだけ多くの人が少しでも良くなろうと頑張つて来ているのだ、と自分に言い聞かせた。おれはずごく恵まれているのだ。

着るものにも氣を付けた。筋肉が無くなつてくると少しの温度差で寒く感じる。出来るだけ厚着をして汗をかくとすぐに着替えた。靴下の足首のゴムはきつくて痛くなるのでハサミで切つて緩くした。

目の充血は、治らず定期的になつて一週間ほどでマシになりまた充血するといつた具合だつた。首元や胸の斑点も少しずつ少なくなつてはいたが消えてはいなかつた。

好きだつた晩酌もやめて、たまに寝酒でワインを少し飲む程度だつた。飲む氣が起こらないといつた方が正しい。

こんな暮らしを毎日続けていると、その日の身体の調子の良し悪しがよくわかるようになる。少し良ければ有頂天になり、悪ければ氣が滅入る。ただただ耐えるしかなかつた。

連載「おっちょこちょいぼけ」(45)

——昭和女、どっこい日記——

小保方さんとお正月…の巻

「あの小保方さん？」と一瞬でも思われた方がいたら、ごめんさい。小保方さんというのは、我が家では「白い割烹着」のこと。若い人は知らないかもしれないが、袖のついたエプロンで、「STAP細胞はあります！」と叫んでいた小保方晴子さんが、叫ぶ前、つまり日本を代表する理系女子として脚光を浴びていたごく短い期間、白い割烹着姿で研究に勤しむ姿がテレビで何回も報道され、何事にも影響されやすい母が「小保方さんはお祖母さんからもらったそうやけど」とタンスの奥から引つ張り出してきた。いくら婆さんとはいえ、いまだき白い割烹着なんてお葬式のお手伝いのおきぐらいいしか出番がない。母の家のある柏原でも葬儀場ですべてやつてしまうことが増えたから、ほとんどまつさらのそれを、「これを着て顕微鏡を覗け」ではなく、お正月の用事をこなせ！という意味で渡されたのである（春夏ならエプロンでこと足りる）。つまり、白い割烹着は私のお正月の労働着なのである。

いまや、小保方さんの名前すら忘れられてかけている去年の暮も、母はきちんとたたんだ白い割烹着を「ハイ、小保方さん」と渡してくれた。

うちの母、いづつどうなるかわからない

が、今現在、九十歳で独り暮らしができるぐらい元気である(第一家がすぐ近所に住んでいるが)。去年の十二月中旬、大阪市内まで一人で用足しにやって来て、「今年は、右手が痛くておせちが作れそうもない」と言った。私は「だったら今年はおせち、買おう」と答えた。当然、お金を出すのは私なのだから、娘の反応として十分、上等だと思うが、母は不満そうに「買ったのはマズイから」。今まで、一度も買ったことがないのに、マズイって決めつけるのはおかしい、みたいなこと言い返すと「アンタは、へ理屈が多い」と怒られるので「お母さんはもう九十歳よそのお母さんより十年、いや二十年以上、長いことおせちを作ってくれたから、もういいやん。S M A Pも卒業、お母さんもおせち卒業ってことで」と明るく言ってみたが、「フンッ」という感じで聞き流し、「アンタ、ちよつと早く(柏原に)帰って来れない?」と言う。もちろん、即答、断った。「お母さん、悪いけど無理。二十八日が納会、年賀状も出してないし、まだほかにやることあるし」。

帰るしかないではないか。

手が痛くてサトイモの皮が剥けないと言っていたが、これを姉が引き受け、サトイモの皮は剥いてあった。黒豆はすっかり出来上がっていて、味もいつも通り、おいしい。(よかった! ボケてない)と妙なところで安心し、「ハイ、小保方さん」と白い割烹着を渡されて、また安心してかけていたら、「シンイチ(息子。私の弟は今夜、何時ごろ(嫁の実家から)帰ってくるのかね(母は静岡生まれで、大阪弁と静岡弁のチャンポンでしゃべるのだが、年とともに静岡弁の比率が高くなっている)。それ、さつきから二回やり取りして、返事するの三回目なんですけど…)。小保方さんをまとった私は猛然とレンコンを切り、こんにやくを結び、ごぼうを洗って(ゴム手袋に突起がついていて、ゴシゴシ洗うと、適当に皮も剥ける便利グッズだが、母が左手用をうっかり買ってしまったので、右利きの私には不便この上ない。母も姉も

右利きなのに、左手用…)、ニンジン在花型に抜き、それらを煮ている間に、カラアゲやトンカツの下準備を手伝う。カラアゲやトンカツは大事な孫たち用なので、あんまり家事の腕を信用してない次女(私ですね)には任せられない。もちろん、私は九十歳になっても、おせちを作り、孫たちをもてなそうとする、母の体力、精神力を見事だと思っている。だが、内心、不満はくすぶっている。

なんだかんだ言って、すべて弟とその子供たちのために体力の限界を超えて、アレもコレもとやりたがっているだけではないか。年相応に、にこにこお年玉を渡すだけでもいいのではないか。

元日も、みんなはまだビールを飲んでいるというのに、せっかちな母に「お雑煮をそろそろ!」とせかさされる。「お雑煮はもう少し後でも…」と言いかけても、「じゃ、アタシがやるから」と言われたら、小保方さんを着るしかないではないか。嫁と姑であつたら戦争だ。ちなみに、嫁はいるが、賢くて常に圏外に身を置いている。「お手伝いしましょうか」と毎年、一回は言ってくれるが、「いいのいいの、座ってて」でおしまい。だから、うちは平和である。私も姉も、この嫁(義妹)を高く評価していて、「いいよね、変にとりつくるわないと」「ウン、良い嫁ぶらないもんね(ウチの息子の嫁と違って)」と意見が一致している。

去年の暮れに、母が弟に「お母さんはもうおせちは作りません」と卒業宣言をしたらしく、お正月にその話が出た時、母は未練げに「○子(私)が早くこつちに来て手伝ってくれたら、できるんやけどね」と言ったら、弟の嫁がキツパリ言ってくれた。「お義母さん、それはいけませんワ。お義姉さんは向こう(大阪市内)で働かな」。

ね、実にシャープなヨメでしょう? 経済の仕組みつてものが義妹にはわかつ

ていて、柏原に私がずっといたら、それは仕事がない!! お金がないということだと承知している。母にはその辺が飲み込めていないが、私はいつも母の経済支援に励んでいるのだ。

例えば、去年の十二月に、母がやってきた用件のひとつは、「アンタ、来年、ケンタ君(弟の上の子)、成人よ。お祝い、どうする?」という相談だった。ケンタは一月一日生まれなのだ。正直、成人式はすっかり忘れていたが、母が帰るときには、「二人でスーツをプレゼントしよう」という話になっていた。

弟に「お祝いにするから、見立ててや」と電話で頼んでおいたら、後日、電話がかかってくる、「そんなに高いヤツじゃないんやけどブランド物にしてやってもええかな」「成人式のお祝いだから、ええよ」「ついでに、靴もほしいって言うかもしれない」「まあ靴はいるもんね」「ネクタイもいい? ついでにお父ちゃんのスーツもいい?」「ネクタイはOK、お父ちゃんのスーツは却下!」ということになって十一万一千六〇〇円。これとお年玉等々含め、今年は十七万円(母へのお年玉が五万円)。小保方さんを着て働いて、それだけの出資。私のお正月は毎年とってもオメタイのである。

(A O)

## 父のシベリア俘虜記

### 『流転八十年』(最終回)

若山哲郎

前号で父が書き残した『流転八十年』は終了しました。最後に残されたメッセー  
ジは後世に対する謝罪であったことは象徴  
的です。父は大正二年(一九一三年)に生  
まれました。一九三〇年代という世界が  
暗黒の時代に入ったとき青春を向かえたの  
です。そして、日本は戦争という悲惨な歴  
史を選択しました。自分には直接責任は  
ないもののその時代に遭遇した世代が後世  
に対する後悔と反省です。しかし、平和と  
いうものが決して戦争という暴力や威嚇  
作られるものではないという教訓は残念な  
がら今日でも教訓であり続けています。最  
終回の本号では改めて、父から見てシベリ  
アでの俘虜とはなんであつたのかを問うて  
みたいと思います。

### 日本とロシア

シベリアソ連邦―ロシアとの関係は日  
露戦争後の一九一九年、大日本帝国が満  
州に権益を得て満州国という傀儡国を作  
りそこに関東軍を置いたことに始まりま  
す。そして関東軍は工作による一九二一  
年の柳条湖事件から翌年の満州事変まで  
中国侵略の野望を図り拡大路線をとりつ  
づけました。そのスローガンは「五族協和」。  
すなわち日本、満州、漢、蒙古、朝鮮の五  
つの民族が一体になり「王道楽土」を建設

していいこうというもの。日本の帝國的植民  
地支配を正当化する根拠として用いられ  
ました。当然、隣国ソ連邦とは国境紛争が  
多発し、一九三九年のノモンハン事件では日  
本軍は大敗しておりました。第二次世界  
大戦が始まると日本はソ連邦とは不可侵  
条約を結びひたすらアジア南方に軍部を  
展開して行きました。同じくドイツと不可侵  
条約を結んでいてそれを無視して侵略さ  
れたソ連邦は同時に日本も信用するはず  
がありませんでした。けれども浅はかな日  
本政府はソ連邦に最後まで米英連合国の  
仲立ちになるよう希望を捨てませんでした。  
今から考えれば何と脳天気な国政で  
あつたでしょう。一九四五年初から日ソ中  
立条約の延長交渉は決裂しています。それ  
でもまだ一年効力は残されていたのです  
が結局、その年の八月になってソ連は中立  
条約を無視し満州国に進軍してきました。  
日本では未だソ連は条約を無視してなん  
と無礼な国であろうかと思われています  
が、ソ連邦は一方では日本と同盟国のドイ  
ツに同じことをされているのです。戦争と  
はそんなものです。

### なぜ抑留されたのか

捕虜と俘虜の違いは以前説明しました。  
戦闘中の捕虜と違い終戦後の俘虜は直ちに  
本国に送還しなければなりません。しか  
し、ソ連はそうしなかつたのです。その理由  
は諸説あります。まずは密約説、北海道  
占領回避、天皇制擁護の見返りに日本国

政府が労働力提供に同意したというもの。  
密約はないがソ連が戦後復興のため労働  
力を必要としたもの。シベリア開発は歴史  
的に流刑者によつてなされているというロ  
シアの体質からというもの。いずれも本当  
のところはわかりません。しかし、大戦後  
は東側ソ連邦対西側米国の冷戦に入つてお  
り、その中の政治バランスによつてもたらさ  
れたものであることは間違ひありません。  
父らの世代の人生は戦争が終了してもま  
だ歴史に弄ばれたのです。

シベリアへの移送は大した混乱もなく整  
然と行われているという不思議も今になつ  
て謎が解けます。父も俘虜記で書いていま  
すが日本人の勤勉とお人好しが災いになつ  
ているらしい。『トウキョウ ダモイ』(東京  
―帰国)。こんな簡単な嘘にすぐに騙され  
る。大した抵抗も逃亡もなく、そして収容  
所ではノルマ達成のために勤勉に働く。父  
も書いているが、同じく俘虜になつたドイ  
ツ人は理不尽な要求は決して妥協しない、  
徹底、団結して抗議する。そして国際法を  
よく理解していると。対して日本人は国際  
法の理解がなく、個人でばらばらになり  
内部で分裂してしまう。「生きて虜囚の辱  
を受けず、死して罪過の汚名を残すこと  
なかれ」という戦陣訓はそれをよくあらわ  
している。個人、自己というものが確立さ  
れていない、命令された集団でしか行動で  
きなない日本人とそうでない西欧人との差  
がはっきりと出ている。悲しいけれども現

実ですね。

### シベリア俘虜の三重苦

極寒、飢えと労働ノルマこれらがシベリア俘  
虜の労苦である。そして当初は収容所には  
旧軍隊の階級も温存されていたとか。これ  
はソ連側が俘虜の管理を間接的に行うた  
めにとつた方法だそうである。父もよく言  
つていたが、ソ連兵は掛け算もできないと。  
人員確認のため列に並ばせても一人ずつ  
勘定しているとか。これは対ドイツ戦で多  
くの兵隊が失われ急場凌ぎの兵隊を採用  
せざるをえない国の事情があつたのだろう。  
日本人将校を経由した間接的管理である。  
しかし、この方法もだんだんと問題化して  
くる。いわゆる思想教育である。ソ連邦は  
国際共産主義運動の一環として俘虜にも  
共産主義教育を実施した。階級打倒を目  
指す共産主義と軍隊階級制度が共存する  
はずがない。様々な内部対立が発生し日  
本人同士での憎悪が蔓延した。ソ連側は軍  
隊階級に取つて代わり共産主義シンパを新  
しい管理側に取り込んだ。

### 帰国後

父は最後まで自分の逃亡を後ろめたく恥  
じていた。よつて全ての軍人恩給や報奨金  
の受け取りを拒否していました。仕方がな  
いと思う。それによつて誰かを犠牲にし、  
誰に迷惑をかけているのでもない。人間が  
極限に立たされ、窮地に陥ればどう振る  
舞うのか。それでも人間性を保つことがで

きるのか。これが問われている。そして国家も同じである。

戦争に敗北した日本国は最後まで何を守ろうとしたのか、本当に国民を守ったのであろうか。大いなる疑問である。

シベリア抑留とは何であったのか。それは戦争が終わっても残される歴史の悲劇のひとつであらう。国家と国家の対立が個人を犠牲にする。国家は最後に何を守るのか。国家は誰のためにあるのか。現代も続いている問題である。

完



## 大人の今昔物語 (29)

石川吾郎

新年おめでとうございます。今回は楽器の琵琶の名器と鬼にまつわる説話です。「羅生門の鬼」伝説、また陰陽師との関連からも興味深い話です。教科書にでない度は、二／五。

げんじょう  
玄象という琵琶が鬼に取られた話 (今昔物語巻二四・二四)

今は昔、村上天皇がご在位の時代、玄象という琵琶が急に失われてしまった。これは代々伝えられたもので、極めて貴重な宝物だったので、このように失われてしまったことに天皇は大いにお嘆きになり、「代々伝わる貴重な宝物が、自分の在位の時代に失われてしまったことだ」と、お嘆きになられたのも、もつともなことだ。「これは人が盗んだのだろう。しかし人が盗んでも、隠し持ってはおられないようなものなので、天皇に対して良からぬことを考える者によって、盗まれたものだろう」と疑われた。

当時、源博雅という殿上人がいた。この人は管絃の道を極めた人で、この玄象が失われたことを残念がっていたが、人が皆静まったところに、博雅が清涼殿に伺候していたとき、南の方角から、例の玄象の奏でる音が聞こえてきた。極めて

不審に思っていると、「もしや、空耳か」と疑って、さらに聞き耳をたてると、まさにこの玄象の音であった。博雅はこれを聞き間違えるようなものではないので、幾度も深く驚き疑って、他人には告げず、直衣姿のままただ一人、沓をはき少年の従者を一人ともに連れただけで、衛門の詰め所を出て南の方角に行くと、さらに南からこの音が聞こえてくる。「近くに違いない」と思い進んでいくと、朱雀門に來てしまった。ここでもさらに南の方角から聞こえてくる。「さてこれは玄象を盗んだ者が、鴻臚館で、密かに奏でているのだろう」と思って急ぎ足で駆けつけると、いざ鴻臚館に着いても音はさらに南の近くから聞こえてくる。さらに南の方角に進んでいくと、いつの間にか羅生門まで來てしまった。

羅生門の下に立って聞くと、門の上の層で玄象を弾いているのだった。博雅、この音色を聞いてみると、不思議な思いにとらわれ、「これは人間が弾いているのではないな。きっと鬼などが弾いているに違いない」と思っていると、まもなく音が止んだ。しばらく間があった、また弾きだした。博雅、言うには「これはどなたが弾いておられるのか。玄象は先頃行方が分からなくなり、天皇さまは捜索をさせておられたのだが、今宵清涼殿で、この音色が南方から聞こえてきた。それを求めてここまで來てしまった次第」と語る。

その時音が止み、天井からすると降りてくる物がある。恐怖で後ずさりしながら、それでもよく見ると、玄象に縄を付けて降ろしてきたのだ。博雅は、おそろおそろこれを取って内裏に戻った。天皇にこの経緯を奏上して、玄象を奉ると、天皇さまはいたく感動なされ、「鬼が取っていったのだ」と仰せられる。これを聞いた伺候している者たちは、博雅を褒め称えた。

\* \* \*

この玄象は宮中の宝物として今の世に伝わっている。この玄象は生命があるように見える。下手に弾いて弾きこなせない場合は、腹を立てて音を鳴らさない。また手入れが悪く塵が積っているような場合にも、腹を立てて音を鳴らさない。その機嫌はあからさまに出るのだった。また内裏の火事があったとき、人が避難させなかったのだが、玄象みずから出てきて、庭にあったのだということだ。これは実に不思議なことだと語り伝えられているということだ。

《終わり》

《コメント》

これは、宮廷に代々伝わる楽器・琵琶の名器にまつわるお話。表題には「鬼」の仕業としていますが、鬼そのものは登場しないのが、印象的です。

人間業とは思えないものが、なぜすぐ「鬼」と決めつけられたのかはよくわか

りません。

羅生門との関連からだったのでしょうか。このテキストの当時（平安末期ころか）からあったのでしょうか。島津久基『羅生門の鬼』（東洋文庫）は、この伝説について考察をして、ゲルマン民族のベオウルフの伝説との類似を指摘していて興味深いものです。

また楽器の名器が、人間のように入格」をもって語られているのも、面白いことですが、これには他にも例があるようです。

ここに登場する源博雅は、マンガの『陰陽師』の中にも、安倍晴明の親友で、管絃の名手で真面目一方の貴族として登場しているそうです。

なお鴻臚館は、当時朱雀通り七条あたりにあったといえます。したがって博雅は大内裏の正門・朱雀門（千本丸太町付近）から平安京の中心の通り・朱雀大路（現在の千本通）をまっすぐ南下して、鴻臚館を経て、平安京の南の果て羅生門に至るコースを歩いたのでした。



## B級サラリーマン渡世譚（42）

明石幸次郎

M商事を出て、明石は東京駅から京浜東北線に乗り、当時まだ東北新幹線は東京駅まで乗り入れしていなかったため、大宮まで在来線で行かねばならなかった。大宮で宇都宮までの新幹線の切符を買って、東北新幹線に乗り換えた。

列車が動き始めてから、暫くすると、ひとりになったことで、今までの緊張感がほぐれて、昨夜の寝不足も重なり、うとうとし始めた。

その時、車掌が検札に来て、声を掛けられたので、居眠りから覚めて、切符を差し出した。宇都宮までは、途中、小山駅で停車しても、三〇分もかからなかったため、再度、うとうとしてしまうのではと懸念した。

丁度、車内販売のカーツが通りかかり「お弁当は如何ですか？」と若い女性販売員から声を掛けられた。弁当を食べていたら、うたた寝をしなくて済むと思いい、直ぐに呼び止めて幕の内弁当と、お茶を買った。

車窓からは、関東ローマ層の黒い土地が広がり、遙か遠くに群馬辺りの山が微かに見え、関西の見慣れた風景とは違い、東国に来たことを実感した。

弁当を食べながら、工場の誰をどう説得して、納期短縮の確約を貰うかを考えて、M商事から口頭でも注文の確約をも

らったことで、これを盾に、先ず工務課、資材課、物流課の担当者を得得して、了解を取り、その後で、課長、工場長、副工場長辺りに挨拶をしておこうと思った。しかし、面識のある人は、誰も居なく、幾ら仕事と言えど、急に工場に押しかけて、こちらの用件を申し立て、それを相手聞いてくれて、了解し、直ぐに動いてくれるかどうかは、全く分からなかったが、営業としては、出荷時期の確約を貰わないと大阪に戻ることはいらないし、歓迎会にも出られないと腹を括った。

これからも、この様な急ぎの仕事でバタバタすることになるのか？出来れば、他人に振り回されるのではなく、自分の方から主体的、能動的、何よりも余裕を持って動きたいものだと思つた。

工場に居た頃は、目先の問題が日々、続々に起こり、それをもぐら叩きみたいにして解決に追われ、バタバタしていた。問題はバタバタしていること自体が何か仕事をやっている評価を受ける雰囲気があった。

転動してきた輸出部では、そんなバタバタ仕事は無いだらうと勝手に思っていたが、二日目からバタバタと、動きまわっている自分がいたのである。

弁当の中身を箸で掴み、急いで口に放り込んだ。味わう余裕もなく食べ終えると、次は宇都宮に停まるので、降りる人は、荷物を忘れない様に降りる準備をして下さいとの、車内アナウンスが流れた。

これで、寝過ぐすことなく、目的地で降りることが出来ると、思いながら、鞆

と空になった弁当の包みを持って、通路を前の方に進んで行つた。

ドアが開くとプラットフォームに降りた。前後の車両からもスーツ姿のサラリーマン風の人が何人か下りて階段に向っていったので、明石もついて行つた。階段を下りて、駅を出ると直ぐにタクシー乗り場が見つかり、ゆっくり歩いて行つた。先に階段を下りて行つた人が先に四、五人が並んでいたが、タクシーは次から次へと客を乗せて出て行つたので、少し待つただけで、直ぐにタクシーに乗ることが出来た。

タクシーに行先を告げて腕時計を見ると、十二時四十五分で、運転手に何分位で行けるか尋ねた。十五分位ですと栃木弁らしきアクセントで、答えてくれた。約束の十三時半までには、三〇分早く行けそうなので、安心した気分になり、運転手に「忙しいですか？」と尋ねた。

「朝と夕方だねエ、お客さんく大阪からですかあ？」と問われた「そうです。なぜ、分かるんですか？」「いや、新幹線が開通してから、大阪のひとが多くなつたべ、アクセントで分かるだべ」と「ほう、大阪からの人が増えた？何故ですか？」「平出工業団地は、半分くれえは、関西からの会社が進出だべ。お客さんの工場も関西の人が多いだべ。分かるんだ。関西の人は、皆さん忙しくされてる！」と答えた。

新幹線に乗れば、今日みたいに、東京で立ち寄り、宇都宮工場で打ち合わせして、それからトンボ帰りをしたら、日帰

り出張も可能である。明石はそう考えながら、そんなせわしい、余裕のない出張は、絶対に避けたいと強く思った。

タクシーの窓から見える工業団地は、道路が広く、工場の一区画が広く、ゆつたりして、工場の周りにはそれぞれ緑地帯が設けられ、植樹された樹木が大きく、環境に配慮されていることで、これからの工場はこういう風になるのかということを見ながら、実感した。

工場に着くと、守衛にタクシーの中から窓を開け、行先を告げると、そのまま、玄関まで乗り入れた。タクシーを降りて、事務所の中に入り、整然と机が並んでいる、工務課の席の方に歩いて行くと、笑いながら手を上げて招いてくれる人がいた。明石も手を上げて、笑っている人の方向に向かって行った。

「いやあ。明石さんですか？始めまして、工務課の〆沢です。急なことで、大変ですね。直ぐに、会議室で打ち合わせをしましょうか？関係者を呼びますので――」と言って、何人かに電話をしてくれた。

窓際の課長席で鋭い目をして、明石を見ている人が居たが、咄嗟にこの人が、M居から聞いていた有名なキーマンのH工務課長だと思った。その人に向かって行って「始めまして、H課長ですか？今度、輸出部に堺工場から来た明石です。M居さんから韓国を引き続きしましたが、今日は、急に納期の件で、無理を頼みに来ました、宜しくお願いします」と、自分でもかなり下手に出ながら、初対面の目

力の強い人に、気持ちは負けないよう視線を逸らさずに、顔を見て挨拶をした。

「おう、お前か、M居の後、ややこしい韓国を引き続いたのは？堺の何処にいたんだ？」と眼鏡から鋭い目をしながら問われた。「プレス部品課です！仲代達矢課長の下にいました」と答えたら、笑いながら「はっはっはー。O園さんか！アンタも苦労したやろ。プレス部品課は協力会社の規模が小さく、能力不足で、品質と納期対応が悪い会社が多いからなあーもつと、課長が考えて、コストダウンだけでなく、協力会社を大きくしないと、親会社だけが大きくなったら、どうなるんや！」と目線が下がった感じで、真剣にお前は考えて資材の仕事をしたのかと、言うように投げかけて来た。

少し後ろから、〆沢から「明石さん、その会議室で、今からお話をしましょうか？関係者が集まりましたので！」と声が掛かって来た。「おう、話をしに来い」と、今度は笑いながら「おい、Sちゃん、明石の言うことを、よく聞いたってくれ。明石君も堺の資材課で苦労したようだが、おい、資材のM本も呼んでるのか？」「はい、呼んでます」と答えた。「明石、M本がうんと言ったら、もう大丈夫や。こいつも変わった奴でなく生まれてから、今まで歯を磨いたことがないと、黄色い歯を見せて、バカみたいに自慢している奴や！」と今度は目が笑いながら言った。

#### オクラの山たより(4)

困生

清少納言の「枕草子」に「ものづくし」の段が多くあることはよく御存知であろう。「海は 水うみ。与謝の海。かはうち海(海は琵琶湖の水うみがよい。塩の海では与謝の海、かわうちの海がよい。)」といった文章であるが、この文章が「枕草子」のおよそ三百段のうちの半数を占めると聞くとちよつと驚く。当然、こうした「ものづくし」には数多くの動物が登場する。「すずむし」「てふ」「ひぐらし」といった虫。鸚鵡、ほととぎす、鷺などの鳥。そして馬、牛、猫。これらの動物に対して清少納言は好感を持って記述しており、嫌悪感をあからさまには示してはいない。しかし、愛犬家の諸氏には申し訳ないが、この王朝時代の才女が犬に対してもつ好感度はまことに低い。

「すさまじきもの」(二五段)では文章の冒頭に「すさまじきもの(殺風景なもの)、昼吠ゆる犬」とあり、「にくきもの」では「犬のもろ声にながながとなきあげたる、まがまがしくさへにくし」とある。「まがまがしくさへ」は「不吉な感じまでもして」という意味で、何頭かの犬が一緒になつて「犬の遠吠え」をするのは気味が悪いといっているのである。これだけのことで速断するのはいかなるものかとは思うのだが、平安京に住む人々が犬に対して持っている感情は「かわいいペット」といった

ものでは決してなかったようである。

まず、貴族たちにとって犬は何より「穢れ」に関わる動物であった。王朝貴族の「穢れ」の観念は「九世紀に淵源し、一〇世紀に入って延喜年間を一つの画期として、ますます錯雑し、肥大化した」(大山喬平氏)といわれている。「穢れ」のついでにくだしい説明はやめるが、「穢れ」とは宗教上の不浄を強調する観念である。「穢れ」の忌避は古代から見られたが、八世紀頃まではわりと無頓着であったらしい。しかし、九世紀以降、「穢れ」の観念は王朝貴族によって肥大化されていく。貴族たちが恐れた「穢れ」は「弘仁式」や「貞観式」によって規定され、国家が発生や解消を管理していた。つまり、何か穢れっぽい事象が起きれば、それが「穢れ」に該当するかどうかは国の中枢機関で判定がなされ謹慎を何日にするかなどを決定していたということである。「穢れ」の中心は死と産であり、死は三十日間、産は七日間、神事の参加や内裏の中に入ることはできなかった。そして、さらに時代が下ると「穢れ」は人間だけでなく「六畜」馬・牛・羊・犬・豕・鶏(豕とは豚のこと)にも穢れと出産の「穢れ」があった。たとえば「延喜式」によると「六畜の死は五日、産は三日、其の宀(肉のこと)を喫するは三日」の間は「穢れ」があり、それが消えるまで身を慎

まねばならないとされた。その六畜の中で最も貴族たちを震え上がらせていたのは今も昔も我々にとって最も身近な動物、すなわち犬であった。

当時の記録や貴族の日記を見ると犬による穢れが内裏も含めて平安京全体で頻発していることがわかる。平安京に生息する犬たちは、たとえば内裏の清涼殿などの「板敷きの下」や「縁の下」でよく生活する。そのため国家にとって重要な場で犬の死穢や産穢がしばしば生じることとなる。

もちろん蔵人や滝口といった人々によって犬狩りはされたが、頻繁に行われることはなく内裏の中に多くの犬が住みつくことになった。いうまでもないことだが内裏に多くの犬がいた以上、平安京全体にはかなりの数の野良犬がいたことになり、この膨大な数の犬たちがおおくの「穢れ」の騒ぎを起こした。以下、そのいくつかの例をあげてみたい。

この時代の貴族の日記には犬とともに「五体不具の穢れ」という言葉が頻出する。藤原実資の「小右記」治安元年（一一〇二）三月一〇日の条に

「内に五体不具の穢れあり、犬、死人の手を噬みて清涼殿の御前に置く」とある。「五体不具」とは死体の一部が欠けていることをいい、「穢れ」はそれを犬

がくわえて屋敷内に入ってくることによって生じる。内裏の、それも清涼殿の前を

人間の手を口にかんだ犬がうろうろして

いたのでは大騒ぎになるであろう。昔、黒澤明の「用心棒」の冒頭シーンで人間の手をくわえた犬が現れて観る人を仰天させたが、なんのことはない、平安時代では珍しい風景でもなんでもなかったのである。

同じような記述を「小右記」の中からいくつかあげてみる。正暦元年（九九〇）十月十七日の条に「犬、小児の頭を咋みて入る。為に七日の暇を請ひおわんぬ」とある。犬

が子どもの頭を口に噛んで屋敷に入ってきたので、穢れの明けるまで七日間のお休みをもらったというのだ。長保元年（九九九）九月八日の条では「家……の下に死人あり。八九歳ばかりの童なり。所々犬に喰

わる」とある。家の前に子どもの死体があり犬に喰われた跡がある、という。「穢れだ」という貴族の叫び声があちこちで起きている陰には多くの犬たちが関わっていたに違いない。

言うまでもないことだが犬に喰われたのは庶民だけではない。「小右記」の万寿元年十二月八日の条には「花山院の女王、盗人のために殺害せられ路頭に死す。夜中

犬のために食われる」とある。花山天皇の女王が盗人に殺害されて路頭で死に、犬に食われている。天皇の王女でも夜に路頭で死ぬと、その死体が犬に食われることとな

った。平安京では死者・病者は犬たちに襲われ、食われることも多々あることであっ

のである。

こうしたことは社会的な弱者である病人や保護者を持たぬ孤児に悲劇は集中する。保護者を持たぬ孤児の行く末が飢え死にしかないことは容易に想像できようが、病人についてはいえば、平安京では自分の家

を持たぬ病人は路頭に遺棄され、しばしば犬の餌食となっていた。すでに書いたように当時の貴族は「死穢」を忌み嫌った。そのため被官人・乳母・下女・女童などが重

い病にかかっても、死亡以前に遺棄された。彼らが同じ家に入りしていても、その死によって家を「穢」とすることがゆる

されない人間であったからである。壮麗な有力貴族の邸宅を一步出れば、平安京には物乞いをする孤児、生後間もない

捨子、路頭にうち捨てられた病人などが数多く存在した。また、たとえ申う人がいたとしても血縁のない死者は山野（鳥辺野や

化野）や河原（鴨川の河原）に遺棄されるのが普通であった。遺棄された死体に犬がむさぼり食っている様子は「餓鬼草子」と

いった絵巻物に多く描かれている。平安京は犬たちにとって生きていく上でのエサには事欠くことのなかった都市なのであ

る。以上のように見ていくと平安京の人々にとって、犬はカラスと並んで好ましい動物では決してない。「虫めずる姫君」という物語はあっても「犬めずる姫君」にはな

さて、ここまで犬の悪口をさんざん書いてきたが、最後に大急ぎでその修正をしな

ければならない。王朝時代の人々も現代人と同じく犬の主人に対する従順さや生命力の強さ（多産であることなど）について

は好ましく思っていたのは間違いない。例えば「枕草子」の「うへにさぶらふ御猫は」（九段）では「翁丸」と名づけられた犬が

内裏の中できれいに飾られて得意げに歩いている姿や何度追い出されても戻ってくる律儀さに感動する話が書かれている。

また、平安時代を通じて貴族や庶民の幼名に「小犬丸」「大犬丸」といった具合に「犬」という語が好んで用いられた。「死人を食

い荒らすのは怖くて気味が悪いけど、人間っぽくってかわいい！」といったところが平安京の人々の感覚だったかもしれない。

「キモカワイイ」感覚（気持ち悪いけれど可愛い）は現代人だけのものではなかったのかな。うーん、ちょっと違うかな？

〈補足〉

先々回、紹介した「枕草子」での常陸介の歌「夜は誰とか寝む 常陸の介……」が芥川龍之介の作品「偷盗」の末尾近くに引用されているのに最近気づいた。芥川龍之介、さすがというべし。新潮文庫「地獄変・偷盗」八十四ページにある。

# 我がおくのほそ道の旅1

成瀬和之

昨秋、山の紅葉を追い求めて東北地方を旅した。八甲田山、八幡平、蔵王と巡ったのだが、体育の日を含む「シルバーク」にぶつかってしまった。東北の紅葉は十月から始まるのだが、うっかりして「シルバーク」のことを忘れていたのだ。自然に親しみ、紅葉を見に来たのであって、人を見に来たのではない。次に磐梯方面に行く予定であったが、行き先を変更し、近くにあった「立石寺」(山寺と通称される)に行くことにした。そこで芭蕉に出会い、そこから芭蕉の「おくのほそ道」の後半部分に添って旅をすることとなった。

「月日は百代の過客にして、生きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを向かふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。」(大空を運行する月や日は永遠にとどまることのない旅を続ける旅客であり、この人生を刻む、来ては去り去っては来る年もまた同じく旅人である。船頭となって船の上に一生を浮かべ、馬子として馬のくつわを取りながら年老いてゆく者は、毎日毎日の生活がいわば旅であって、無所住の旅を自分の常住の生活としている。李白・杜甫・西行・宗祇など風雅の道の先人たちも、多く旅の途上で死んでいるのだ。新版「おくのほそ道」角川ソフィア文庫よ

り。以下引用は同書よりする。(これは「おくのほそ道」の冒頭部分である。中学校や高校時代の国語の時間に暗唱した(させられた)人も多いと聞く。だが、私はそのような経験もなく、「おくのほそ道」への興味・関心も若い頃は高くはなかった。

芭蕉は、四十六歳の元禄二年(一六八九年)三月二十七日(太陽暦五月十六日)に江戸深川を出発し、八月(同十月)に大垣に到着する、全行程約六〇〇里(約二四〇〇キロメートル)、約一五〇日間の旅をし、その旅をもとに「おくのほそ道」を書き上げた。

だが、私の「おくのほそ道」の旅は立石寺から始まる。芭蕉の「おくのほそ道」の後半部分である。なお、芭蕉の旅は徒歩と船旅が中心であったが、私の旅は自動車の旅となったことをお断りしておく。次回から私の旅は、山寺、最上川、象潟、出雲崎、市振、金沢、山中、敦賀、大垣と順次進む。ここで芭蕉の「おくのほそ道」の旅は結びを迎えるが、私の旅は、芭蕉が旅の途上に病没した大阪、墓のある膳所へと続く。そして、芭蕉出生の地である伊賀上野を経て、江戸深川から再び芭蕉の「おくのほそ道」の旅の前半部分に戻ることにする。長い旅路ですが、どうか私の旅にお付き合いください。

# 孫ウオツチング(13)

福田圭

二〇一六年十二月十九日(月)「孫ウオツチング」の連載を始めて一年になる。光ちゃん十五か月になろうとする。生まれた時に約三キロであったのが、今や十一キログラムになった。抱いてみるとじいちゃんにはとても重い。間もなく歩き出す準備が出来てきている。ハイハイが「高這い」で自由自在にできるようになっている。方向転換も素早い。二階への階段も上がれるという。おもちゃの自動車ポッポにも自分でよじ登ってまたがり、前後に移動できる。テーブルに手をつけて立っていられる。二、三秒手を放しても立っていられるようになったという。父親に手を引かれて、足を交互に出して「歩ける」。足腰がしっかりしてきて、バランスもとれるようになっていく。歩き出すのは時間の問題であろう。四角い積み木を親指と人差し指で持てるようになってきた。まだ言葉は話せないが、マンマとかいくつかの単語の意味が分かってきているようだという。

自立し、道具を使い、言語を獲得する人間として、孫とともに大人も人間理解を深めていきたいものだ。

# 米国紀行2

河原林成行

いざ、米国24、1997

藤田様、米国紀行・第二話をお届けします。

但し、我々の旅行は清純無垢なものであり、貴方がニューヨーク(NY)や英国で以前になされたような法に触れそうな行為はしていません。ワシントンDCの帰りに無修正の「pentハウス(Penthouse)」誌を、ペンシルベニア駅のキオスクで購入したりしていません。

五月一日(木)、晴。

関空(関西空港)を十五時十五分発のノースウエスト航空North West 707便で、デトロイト経由ボルチモア(ボルチモア・ワシントン国際空港 Airport)へ向かいました。正味十四時間のフライトで、ややお疲れ気味でした。

デトロイトで入国手続きと乗り換えのために少し時間があり、ウロウロした時にやっと体が動かせて一息つけました。喫茶店へ入り、日本より多めのアメリカンコーヒーと大ボリュームのサンドイッチをほおばり、ドルで支払いをした時に「アメリカへ来たか」という実感がしました。

五月になったばかりのデトロイトは、大地も木々もまだ春浅きという感じで、緑はなく、殺伐としました。あのKLM航

空を買収した(?)ノースウエスト航空機ばかりがやたらに目に付きました。

ボルチモア・ワシントン国際空港には予定通り日没前の十九時頃に着きました。初めて踏むアメリカの土ですが、頼りになるのは出発直前に新婦となるネディーンの人くれた地図一枚のみです。その地図もかなり荒っぽいもので、アメリカ人が見たらある程度分かるようなものです。逆にいうと、そんなもの一枚を頼りに行く方も行く方ですが、バイウエイ(自動車専用高速道路)の出口20を出た所に我々の宿の「ザ・コンフォート・イン(The Comfort Inn)」がある、というものでした。

その程度ですから、ボルチモア・ワシントン国際空港から「我々の宿」の「ザ・コンフォート・イン(The Comfort Inn)」へ辿り着くまでに一悶着ありました。

ボルチモア・ワシントン国際空港のタクシー乗り場で、「ボルチモア」「市内」へ行くのか?と運転手が寄ってきます。その意味もよく確かめないうまま、「Yes」と言つと、快く荷物を運んでくれ、一路「ザ・コンフォート・イン(The Comfort Inn)」へ向かいます。このよく意味も分からないのに「Yes」と言う曖昧さ及び優柔不断さがこのあとニューヨーク(NY)でもトラブルの原因となります。

タクシーは快適にボルチモア「市内」の「ザ・コンフォート・イン」を目指します。この

時に運ちゃんに指示していたのは、ネディーンの人くれた地図に曲がりなりにも載っている「ザ・コンフォート・イン」ではなく、ガイドブックに載っている「市内」にある「ザ・コンフォート・イン」の方だったのです。運転手には、ネディーンの人くれた地図も渡してはいたのですが、彼は、住所や「E」がしつかり印刷されたガイドブックの方しか見ません。私が運転手であっても、そうしたと思っています。

バイウエイ(自動車専用高速道路)も通らず、十五〜二十分で着くはずの処が、三〇分程かかって、黄昏ときの美しいボルチモア市内の有名な野球場やヨーロッパの香りを漂わせ、歴史を感じさせる道路や街並やシンボルのジョージ・ワシントン(George Washington)の騎馬上像を通じて、市街地にある「ザ・コンフォート・イン(The Comfort Inn)」に着きました。

「やっと着いた」と思うにはどうも様子が違うし、おかしいと思つてタクシーを降りてフロントへ行くのと確かに「ザ・コンフォート・イン(The Comfort Inn)」と看板が上がっています。いかにも上等そうなホテルです。何かおかしいので、今度はネディーンの人くれた地図を見せて確認しました。

すると、運ちゃんは「ここはこの地図に書かれている場所とは違うし、その地図の場所はボルチモア市内ではないよ」と言いま

す。このタクシー会社にはボルチモア「市内」をテリトリーとするものだったのです。それで、ボルチモア・ワシントン国際空港で「行き先は、ボルチモア」「市内」か?と聞いたのです。タクシーの運転手にとっては、目的の地が「市内であるかないか」が重要だったのです。

ようやく様子が飲み込めて来たので、「でも、我々の行きたいのはこっちだ!ここじゃない」と言つと、「分かった。そちらへ行く。でも、ここ迷い込んだのは私のせいじゃない。それに、「行き先は、ボルチモア市内」と言つたじゃないか」と自分を一生懸命正当化します。プロ根性です。

そこで、彼を安心させるために、「我々はボルチモアは初めてだし、ましてや同名のInnが二つあるなんて知らなかった。手書きの地図にある出口20の方へ行つてくれ。料金は払うから心配するな。」と言つと、「それじゃ」と言つて、国道695線の環状ハイウェイ(Route 695 Belt(High)Way)の出口を出た所のボルチモア「郊外」の「ザ・コンフォート・イン(The Comfort Inn)」へようやく到着できました。隣には「The Holiday Inn」がありました。そういうタイプのホテルです。

運転手には、割高料金四五ドルと要求されたチップ五ドルを渡してBayeしました。到着時刻は一九時五〇分でした。三〇分以上さ迷っていたことになりました。

## 明治は遠くなりけり

大江稚鬼

俳人の中村草田男が「降る雪や明治は遠くなりけり」と吟じたのは、昭和の初期のことだった。とある雪の日、何かの理由で母校の小学校を訪れていた俳人の前を数名の学童が通り過ぎる。その姿格好が自分の幼い頃とはまったく異なっていたことから、ふと口を衝いて出たのが「明治は遠くなりけり」だったそうだ。俳人をして隔絶感を抱かせしめたのは子供たちの服装であり、それを契機として、言つてしまえば根拠のない主観的な感慨が浮かんだに過ぎない。だが、このフレーズが俳句としての体裁を整えて発表された後、社会に広く受け入れられたのは、昭和に軸足を置いた時の明治と呼ばれる時代が、すでに大正を間に挟んだ彼方に過ぎ去っているというコンセンサスとしてあつたからだろう。

元号など後付けの装いにすぎず、連綿として流れる時間には明示的な区切りは存在しないという見解もあるが、ひとたび元号という装いが与えられると、時間そのものがはっきりと色分けされてしまう。昭和が平成に替わる際、内閣官房長官談話では元号制度について「日本国民の心理的一体感を示す支え」という表現が用いられたが、これは的確な言い回しである。

江戸時代以前、すなわち元号で言うところの慶応以前であれば、改元は一握りの判

断によって恣意的に行われることもあった。それに対して明治以降は国家の制度として天皇の一代一元号が確立されたので、元号による括りが時代感と重なり合うようになった。それだけに「明治は遠くなりけり」というフレーズが時間的懸隔感を強調するように感じられるのだろう。

さて平成二十九年の今日において「明治は遠くなりけり」というフレーズが注目されるとすれば、その文脈は明らかである。これをアレンジしての「昭和は遠くなりけり」を呼び出すための伏線としてである。確かに昭和が終わって四半世紀以上の歳月が過ぎていたのであれば、昭和という時代が回顧の枠内で捉えられても不思議ではないし、歴史として批評の対象となったとしても可笑しくない。さらに今上陛下の生前退位が議論されるようになると、平成もそろそろ……という認識も静かに広まっている。そしてなによりも、昭和と呼ばれた頃に比べると、諸々の情勢は大きく変わってしまったということが厳然たる事実として目の前に存在している。

し、中華人民共和国も今日ほどの影響力は持っていないかった。第二次世界大戦後の国際政治のキーワードである「冷戦」が続いていた時代である（ちなみに冷戦の象徴でもあるベルリンの壁が崩壊したのは一九八九年、日本の元号でいうところの平成元年の秋である）。国内政治に目を向けると、五十五年体制と呼ばれた与党Ⅱ自民党／野党Ⅱ社会党という構図が綻び始めた頃だろう。土井たか子のもとで社会党が躍進したり、新党ブームと呼ばれる流れが起こるのは、まさにこの後、平成になってすぐの頃である。世相でいうならバブル景気幕開けの時代で、テレビのなかでは「トレンディ」ものが幅を利かせていた。現代人の生活と切っても切り離せないパソコンは専門家か一部のマニアが遊ぶ程度で、携帯電話やスマホに到っては、その前史にも到達していない。

ひとりで昭和を取りあげるとすれば、ひと昔前であれば戦前から太平洋戦争の時代、そして高度成長の頃までがおもに注目されていたように記憶している。だが最近では平成への変わり目の頃もターゲットになってきている。そのくらいに、平成になって以降の変わり方が著しいということなのだろう。

ところで大きな変化というと、NHK大河ドラマが思い切った変化を見せるようになっていけば三十一（一九六四年の東京オリンピック）放送予定分についての話なのだが、

ックをテーマに制作されるとの報道があった。NHK大河ドラマという時代劇の代名詞であり、基本的には江戸時代までを扱ってきた。リアルタイムで見ていた記憶はないのだが、「花神」や「春の波濤」などの近現代ものが視聴率的に奮わなかったせいなのか、明治政府成立が下限の目安となっているように感じていた。それだけに「八重の桜」では、明治以降にどのくらいの比重を与えるのが興味津々だったのだが、それなりの扱いをしていたので大河ドラマがいよいよ明治を「歴史」の範疇で捉えるようになったかと思つたものである。

下限に関する目安が存在していたのかどうかの真実はさておき、事実上、明治政府成立までが大河ドラマの描くところだった頃は、近現代を取りあげるのは大河ドラマとは別枠の作品だった。連続テレビ小説であったり、スペシャルドラマと銘打たれた特別ものだったりという具合にである。そうした流れがあるなかでの、東京オリンピックピックをテーマに大河ドラマなのである。思い切ったことをするものだと思

ている。視聴者の間に蔓延していた近現代アレルギーは解消されていると判断したのか、二〇二〇年の東京オリンピックに対する過剰な期待が為せる業なのか、それとも昭和という時代が個々の記憶や感傷ではなく、紛れもない歴史に組み込まれたということのアピールなのか、そのあたりの事情は分からない。それでも評価というか

解釈はともかくとして、大河ドラマ枠に昭和をもつてくるのは英断である。

#### 編集後記

新年あけましておめでとうございます。今年もよろしくお祈りします。

正月に愛宕山に友人らと登り、神社で神酒の神聖を頂きました。友人が持参してくれたトチ餅のぜんざいや雑煮を振る舞ってもらい正月気分一杯の愛宕山でした。

夏の千日参りと正月の初詣は続けたいです。参道に三〇〇回登った人の石碑が三本も立っていました。継続は力なり、と思いを新たにしました。

「芥川だより」もおかげさまで一二〇号まで来ました。少しでも長く続けられるように神様にお祈りをしました。皆様のご支援をお願いします。

（嘉）



あけましておめでとうございます

卒寿でも頼りにされるうぬぼれを

気楽さと、うぬぼれとプラスにし  
ながら頑張つて生きてゆくか。

老いるということに対して、気持  
ちだけは元気に、でも肉体は確実に  
衰えてゆく。

昨日出来たことが、今日は出来な  
い。同じ話を繰り返す、人の名前を  
間違える。新しいことに手が体が、  
これはもう笑うしかない。また自分  
流に考えていた事も、むしろこれも  
年齢を重ねた末の大きな心境の変  
化なのか。新しい年と共に、気持ち  
も踏みだすこと。死ぬことは忘れて。  
そんな心持ちで今後の人生を生  
きていければいいなあとは私を考え  
ています。

### 今年の抱負

こんな一年にしたい。何かを始め  
たい。まずは、その願いを形にした  
い。  
すこやかに、健康で卒寿「九〇才」  
を過ぎて満願の上寿「一〇〇才」に  
一歩ずつ前進してゆきたい。

### 勇気湧く新年

新しい年を迎え、今年こそはと勇  
気づけられることが多くあります。  
新聞で「書店へいらつしやい」で紹  
介された「おべんとうの時間」引き  
付けられてしまったこと。

ひたむきな物語りであるようで、  
面白かった。これだったら自分にも  
出来るかと勇気づけられたこと。

一般の人の弁当の写真と聞き書  
きで構成され、登場者の歩み、喜び、  
悲しみ、家族、仕事のことなどが記  
され私にも覚えのあるような弁当  
もあり、うれしかった。普段着のよ  
うな中味に親近感を抱き、よし「今  
年はこれでいこう」今日も弁当をつ  
くつて食べよう。  
九〇才を越えた心に灯がともつ  
たような思いがして、年齢を意識せ  
ずに頑張つて生きてゆく。

### 新しい年を

終い弘法で、フトム目についたスト  
ーブ、達磨ストーブである。大分さ  
びついていたけれど懐かしい思い  
出にひたることが出来た。思わず火  
の気もないのに、両手をかざしてい  
る自分に赤面してしまった。

お腹がふくれダルマさんのよう  
な顔、ヘソのあたりに薪の入れ口が

あり下に灰取口がついていた。くす  
ぶつて燃えない時は教室中煙だら  
け、当番の人は、かまどの口へゆき  
火ばしを入れてやつと燃え出し真  
っ赤になった。ダルマさんが怒った  
顔になり、ガタガタ身をゆらして燃  
えてるのが見える。

お昼の時間が近づくと、それぞれ  
の弁当箱が上につけて温めて食べ  
るのだ。

梅干し入り、たくあん入りの弁当  
である。それらしい包みが教室中に  
流れ込む。

先生は、それが気に食わないと見  
え、しかめ面をしていた。口の悪い  
生徒たち「せんこう」と悪口をいう  
が、あつたかくなつた弁当を開いて  
「ああ美味しい」と抱き合つて喜ん  
だ友は今何処。あの弁当の味、ダル  
マストーブは。

新しい年をむかえるたびに、ふる  
い思い出にひたる私がここに健在  
する。

### 俳句

土田 裕

余生への思案あれこれ初詣

あきらかに老人の顔初鏡

老いしゆえ

これがかぎりと言ふ賀状

呼び声もかすれてをりし

残り福

初夢やテロと天災なき世界

影山武司

初日待つ雁かりがねつつみ堤風渡る

初富士や剣ヶ峰より茜さし

元旦や紙垂しでを新たに人迎ふ

佳き日かな

会う人ごとに賀詞交わし

正月の凧や鳶と競ひをり

達磨爆ぜ

青竹爆ずるとんどかな

どんど餅

火中に落ちて泣く子かな

どんど焼仕舞ひて眉に灰残る

